
ハヤテのごとく！ 君と一緒に

海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハヤテのごとく！ 君と一緒に

【Nコード】

N0340L

【作者名】

海斗

【あらすじ】

この物語は

不幸な執事 綾崎ハヤテと

才色兼備、文部両道、成績優秀な白皇学院生徒会長 桂ヒナギクが
繰り広げる、ラブコメディである。

第1話 告白(前書き)

初めまして、海斗です。

初めての投稿なので、下手かも知れませんが宜しくお願いします。

第1話 告白

ハヤテ 「ヒナギクさん好きです」

ヒナギク 「えっ、それ本気」

ハヤテ 「はい、本気のことを証明して見せます」

そして、ハヤテの顔がだんだん近づき

二人の距離が0に成りかけたその瞬間！

ピピピピピッ

当然、夢落ちなんでっす！

ヒナギク 「また、ハヤテ君の夢見ちゃったな。ここ最近、多すぎよー！」

たっ たっ たっ たっ

ヒナギク 「おはよう、お義母さん」

ヒナママ 「おはよう、ヒナちゃん」 ニコニコ

ヒナギク (何であんなにニコニコしているんだろう)

ヒナギクがコーヒーを飲むとした、その時！

ヒナママ 「綾崎君となら、いつでもOKよっ」

ゴホッ！ 噎せました

ヒナギク 「何でそこで、ハヤテ君が出て来るのよ」

ヒナママ 「だって部屋の前、通ったらハヤテ君って聞こえたから、もしかして告白された？」

ヒナギクは、これ以上いたら、もっとイジラレルと思い。

ヒナギク 「~~~~~！！もう！学校行く！！」

ダッシュで家を出た

ヒナギクがまだ寝てる時間に戻し、ハヤテは、と言うと

あれっ、ここは？

すると、突然なぞの人物が現れて、なぞの人物が、ハヤテに言った

なぞの人物「おぬしに今後、幸福が訪れるであろう」

そう、いい終わると同時にハヤテの目が覚めた

ハヤテ 「んっ、んー（幸福って何だろ）」

そう思いながら、執事服に着替え、主の三千院ナギの部屋に向かった

コンコン、失礼します

ハヤテ 「お嬢様、学校に行きましょう」

ナギ 「ん、今日は学校には行かんぞ」

ハヤテ 「そうですか」

場所はリビングへ

ハヤテ 「マリアさん、今日少し帰るのが遅くなって良いですか」

マリア 「ええ、別に良いですよ。でも、あまり遅くならないで下さいね」

ハヤテ 「はい」

登校中

ハヤテ 「あつ、ヒナギクさん、おはようございます」

ヒナギク 「あつ、ハヤテ君、おはよう」

ハヤテ 「ヒナギクさん、顔が赤いですけど大丈夫ですか」

とハヤテが額に手を当てて笑顔で言うと

ヒナギク ドキッ「大丈夫よっ」

とヒナギクも笑顔で返した

ハヤテ ドキッ

ヒナギク 「ハヤテ君も大丈夫」

ハヤテ 「大丈夫です」

ヒナギク 「そう、なら良かった」

ハヤテ 「それでヒナギクさん、今日の放課後、あいてますか」

ヒナギク 「大丈夫よ」

ハヤテ 「じゃあ放課後、初めて会った木の下に来てください。
話があります」

ヒナギク 「う・・・うん／＼／＼／＼（告白かな）」

そして放課後

ハヤテ 「ヒナギクさん、まだかな？」

ヒナギク 「ハヤテく〜ん」

ハヤテ 「ヒナギクさん」

ヒナギク 「で、話って何？」

ハヤテ 「はい、それじゃあ言いますよ」

ゴクリ

ハヤテ 「僕、綾崎ハヤテは桂ヒナギクさんの事が好きです。付き合っていただけませんか」

ヒナギク 「喜んで」

そういうとヒナギクはハヤテに抱きついた

ハヤテ 「ヒナギクさん／＼」

ヒナギク 「いや？」

ハヤテ 「いえ／＼」

ハヤテは真っ赤だ

それからしばらくして

ヒナギク 「ハヤテ君」

ヒナギクは目を閉じていた

さすがにハヤテでも分ったのか

そつと唇を重ねた

数秒して離れた後温かい風が吹いた

ヒナギク 「気持ちいいね」

ハヤテ 「そうですね」

何も言わず座っていた

ヒナギク 「ねえ、ハヤテ君。これからは、呼び捨てで呼んで」

ハヤテ 「うん。分かったよ、ヒナギク」

ヒナギク プシュ〜「あっ、えっ／＼／＼やっぱ、ヒナって呼んで
／＼／」

ハヤテ 「うん、ヒナ」

ヒナギク 「ありがとう」

ハヤテ 「どういたしまして」

ヒナギク 「ハ〜ヤ〜テ〜君」

ハヤテ 「何？ヒナ」

ヒナギク 「何でもない」

それから、ハヤテ、ヒナとそれが繰り返し替えされ、気づけば日付が変わっていた。

ハヤテ 「それじゃあ、そろそろ帰ろうか」

ヒナギク 「うん」

しばらく歩いて

ハヤテ 「それじゃあ、ヒナまた学校で」

ヒナギク 「うんまたね」

そうしてハヤテは、屋敷に戻るのであった。

第1話 告白（後書き）

海斗です。どうでしたか？

一人でも多くの方が読んでくれれば、幸いです。

これからもドンドン投稿していくつもりなので宜しくお願いします。

第2話 彼女ンち

ハヤテ 「やっぱ、遅くならないうちに帰ってこいって言われたのに、日付が変わっているよ。どうしよう」

誰もいないよな。

マリア 「ハヤテ君！」

ハヤテ 「マツマリアさん。いつからそこに」

マリア 「メイドには、神出鬼没のライセンスがデフォルトに備わっているんですよってそれより、あまり遅くならないようにっていいましたよね」

ハヤテ 「すみません」

マリア 「まあ、遅くなった理由は後で聞きますから・・・」

ナギ 「いや、今聞かせてもらおうか」

ナギ 「何だと、じゃああの時の言葉は嘘だったのか！」

ハヤテ 「あの時の言葉・・・」

ナギ 「ああ！君が欲しいって言葉は愛の告白だったのだから」

ハヤテ 「何言っているんです、お嬢様。あの時の言葉は誘拐するために言った言葉ですよ」

ナギ 「何言ってるんだ、ハヤテ」

ハヤテ 「お嬢様こそ、何を」

マリア 「その事は、私から話します」

マリアは全て話した。

ハヤテがナギを誘拐しようとした事

誘拐する為に言った言葉を愛の告白と勘違いして、執事として雇った事

ナギ 「そうだったのか・・・私が全部勘違いをしていたのか」

ハヤテ 「お嬢様」

ナギ 「ハヤテ、お前は今までよくやってくれた。だから、今日限りでお前は首だ。ヒナギクの所へでも行ってくれ。だが、友達では居てくれよ」

ハヤテ 「はい！」

ナギ 「学費は払ってやる。それと、たまにはヒナギクと遊びに来てくれよ」

ハヤテ 「はい！」

ナギ 「ヒナギクと一緒に、私が旅行に行くとき屋敷の掃除をしてくれ」

ハヤテ 「はい！」

ナギ 「ありがとう、またな」

ハヤテ 「はい、また」

マリア 「ナギ、これで良いんですか」

ナギ 「ああ、ハヤテは今までたくさん苦勞をしてきた。だから、これからは自分の為に生きて幸せになって欲しいんだ」

マリア 「ナギ（大人になりましたね）」

負け犬公園

ハヤテ 「ヒナはどこかな」

ヒナギク 「ハヤテ君！ どうしたの!？」

ハヤテ 「いや、三千院さんに捨てられて、ヒナの所に行けって
言われて、ヒナを探してたの」

ヒナギク 「そうなんだ〜じゃあハヤテ君!家に来なさい」

ポカ〜ン

ハヤテ (えーっと、僕は何でここにいるんだ。たしか、公園で
ヒナに拾われてと言う事は…)

ヒナ家のお風呂〓ヒナがいつも体を洗ってる

ハヤテ (何考えているんだ、僕は!!!!!)

ヒナギク 「あつもう、あがつたんだ。どう?気持ちかった?」

ハヤテ 「うん。とても」

ヒナギク 「そう。なら良かった」

ヒナギク 「でも、学校はどうするの?」

ハヤテ 「三千院さんが学費、払ってくれるって」

ヒナギク 「そうなんだ〜」

ハヤテ 「うん」

ヒナギク 「で、家うちに住むの?」

ハヤテ 「いいの?」

ヒナギク 「良いわよね、お母さん」

ヒナママ 「いいわよ。でも今日、夜勤だから夕飯は二人で食べてね」

ハヤヒナ 「うん(はい)わかったわ(わかりました)」

ヒナギク 「さあ、ハヤテ君。学校行こ」

ハヤテ 「うん」

ヒナギク 「そうだ、ハヤテ君。放課後、生徒会の仕事。手伝ってくれる?」

ハヤテ 「うん、いいよ。ヒナの頼みだしね!」

ヒナギク 「もう、速く学校行くわよ」

第3話 学校（前書き）

こんにちは、海斗です。

この話では、僕の考えたハヤテの必殺技と武器が出てきます。
説明とかは後程しますので宜しくお願いします。

第3話 学校

ヒナギク 「ハヤテ君」

ヒナギクがハヤテの腕に抱きついてきた

ハヤテ 「ヒナ、恥ずかしいよ」

ヒナギク 「いいじゃない。それとも、ハヤテ君は私に抱きつかれると嫌なの？」

と上目使い&涙目で言っ て来た

ハヤテ 「嫌じゃないけど、殺気が」

ヒナギク 「そんなのいいじゃない」

と言っ て歩き出す

教室に入っ てから、僕にはみんなからの筆問攻めだった

生徒A 「綾崎は桂さんと付き合っ ているのか!」

ハヤテ 「付き合っ ていますよ、ねえヒナ」

ヒナギク 「うん」

生徒A (がーん)

生徒B 「綾崎君、何で今日は執事服じゃ無くて制服なの」

ハヤテ 「執事を辞めたからです」

一部

東宮 「綾崎いーよくも桂さんを！」

虎鉄 「綾崎はあんな女のどこが良いんだ」

ハヤテ 「ヒナの事ですか!？」

虎鉄 「え？」

ハヤテ 「あんな女って言うのはヒナの事かー!!」

ハヤテ 「龍雅!村正!」

ハヤテ 「スカイ・インフィニティイイイイイ!」

村正から赤い不死鳥が、龍雅からは青い龍が出てきて、虎鉄に襲い掛かる。

虎鉄は逝った

そして、放課後

ハヤテ 「ヒナ、生徒会室に行こう」

ヒナギク 「うん」

とって、ヒナギクはハヤテの腕に抱きついた

ハヤテ 「ちょ、ヒナ／＼／」

ヒナギク 「いいじゃん、いいじゃん」

ハヤテ 「まあそうだね」

生徒会室

ハヤテ 「うわゝ何これゝ」

ヒナギク 「何でこんなに書類があるの！早く帰らないと、ハヤテ君に甘えられないじゃない！！」

ハヤテ 「ふゝん。そつかそつか、ヒナは、僕に甘えたいんだ」

ヒナギク 「なっ．．．／＼／＼／」

ヒナギク （しまった．．．．．怒りで我を忘れてしまいつい、口が滑っちゃった）

ハヤテ 「じゃ、これからは僕に思う存分、甘えてください」

ヒナギク 「．．．．．うん／＼／＼／」

ヒナギク （も、もお．．．ハヤテ君ったら．．．）

こ、後悔したって知らないんだからね？ハヤテ君が甘えろって言ったんだから、もお気が済むまで甘えちゃうわよ？（

ハヤテ 「だったら、早く終わらして家に帰ろう」

ヒナギク 「うん!」

カリカリッ

ハヤテ 「んー終わったー」

ハヤテ 「さあ、ヒナ帰る」

ヒナギク 「すーすー」

ハヤテ 「ヒナの寝顔。かわいい」

と言って毛布を掛けてあげて、ヒナにキスをして僕も寝た。

それから、少し経ってから僕は起きた。

ハヤテ 「ヒナっ起きて。帰るよ」

ヒナギク 「んっんー。はい」

ハヤテ 「ヒナは今日、何食べたい？」

ヒナギク 「カレーとハンバーグ」

ハヤテ 「ヒナって本当に、カレーとハンバーグ好きだよね」

ヒナギク 「いいじゃない。カレーもハンバーグも美味しいんだか

ら
」

ハヤテ 「まつ、そんなヒナも好きだけどね」

ヒナギク 「ふえっ！！ そんな事、こんなところで」

ハヤテ 「そんな風に照れたところも」

ヒナギク 「もう」

美紀 「いい動画が取れたな」

理沙 「そうだな」

泉 「うん」

美紀 「これ以上いると、ばれそうなので、今日のところは撤収」

理沙・泉 「ラジャー」

ハヤテ 「さて、家に帰って料理を作ろうかな」

ヒナギク 「ハ―ヤテ君」

とハヤテの腕に抱きついてきた

ハヤテ 「何、ヒナ？」

ヒナギク 「だあゝいすき」

ハヤテ 「もうヒナったら／＼／＼／」

ヒナギク 「えへへ」

第3話 学校（後書き）

海斗です。

どうでしたか？

虎鉄はハヤテにやられてましたね。
哀れです。

次回も是非とも読んでください。

第4話 お風呂

ハヤテ 「よし、作るぞ」

ヒナギク 「期待してるね」

ハヤテ 「うん！ヒナの為にとっても美味しい、カレー作るよ」

ヒナギク 「頑張ってるね」

ハヤテ 「うん！」

ハヤテ 「よし、作るぞ」

ハヤテ 「ハンバーグはこれくらい捏ねれば、大丈夫だな」

ヒナギク （ハヤテ君の作ったカレーとハンバーグ早く食べたいな）

ハヤテ 「ヒナー出来たよ」

ヒナギク 「うん」

ハヤ・ヒナ「いただきます」

ヒナギク 「やっぱり、ハヤテ君の作るカレーとハンバーグは、世界一だね！」

ハヤテ 「ありがと。そう言ったら貰えると嬉しいよ」

ヒナギク 「美味しい」

ヒナギク 「あつ、ハヤテ君。ホッペにカレー付いてるよ」

ヒナギク （そう、ハヤテ君ってばどういう食べ方をしたのかわからないけど、右のほっぺにカレーが付いてるの。

さっきまでカレーに夢中だったから気付かなかったけど、一体いつから付いてたのかしら？）

ヒナギク 「ああ、ちょっとダメよ袖で拭いたりしちゃ。私が拭いてあげるから、顔こっち寄せて」

ハヤテ 「う、うん」

洋服の袖で拭こうとするハヤテ君を制し、私は拭きやすい様に顔をこちら側に寄せるよう言った。

そしてハヤテの左のほっぺに手を添えて、右側に付いたカレーをペロンツと舐め。

ハヤテ君の顔がみるみる赤くなっていくのが分かる。

ハヤテ 「ヒ、ヒナ！？何を…ッ」

『何をしてるの！？』って言いたかったんでしょね、きつと。

でもハヤテ君は最後まで言い切ることができなかった。私が言わせなかった。

ハヤテ 「んっ…ッ…」

顔はお互い真っ赤なままで。今更になつてちよつと恥ずかしくなつてきたり、ちよつと背伸びしちやつたかもつて思つたり。

ハヤテ君がどう思つてるか分からないけど、きつと私には敵わないつて思つてるんじゃないかな。

ヒナギク 「ねエ…その。お風呂、なんだけど… / / / / /」

いつものハヤテ君なら、適当に理由をつけて逃げてしまうところでも、今は雰囲気的にいい感じだし、もしかしたらこのまま…

と、今にもショートしそうな私の頭の貴重な冷静を保つた部分がそのとき働いた

ハヤテ 「ん？」

ヒナギク 「その…い、一緒に入る？」

ハヤテ 「えつ、でも…」

ヒナギク 「ハヤテ君は私と一緒に入りたくないの？私のこと、嫌いになつちやつた？」

ズドーン……………

爆弾投下、グイツと僕の方に顔を寄せて上目遣い＋涙目のヒナに僕の心はとうとう折れた。

ハヤテ 「でも…」

ヒナギク 「何よ、自分で甘えてつていったんじゃない…」

と少し落ち込んだ声のトーンで言ってきたヒナギクに、ハヤテは

ハヤテ 「分かったよ……………一緒に入ろう」

ヒナギク 「うん」

それはもお心底嬉しそうなヒナ笑顔。太陽のごとく輝いて、眩しくて眩しくて、でも眼を逸らすなんてことはできない。

そんな素敵な笑顔を見れたなら別にいいかな、と考えてしまう僕のどうしようもない思考回路。

どうも僕はヒナの笑顔と弱々しげな表情に弱いらしい。マズいな、ヒナに知られたらそれこそやられたい放題だ…

ヒナギク 「何してるのハヤテ君、早く早く」

ハヤテ 「ハイハイ、今行くから」

いつの間にかリビングのドアのところまで移動して僕を急かすヒナ。僕はソファから腰を持ち上げて彼女の元へと足を進めた。

カポーン

ハヤテ 「ふ〜気持ちいい〜」

ヒナギク 「私も〜」

ハヤテ 「そろそろ、体洗おうかな」

ヒナギク 「じゃあ、私も」

ヒナギク 「ハヤテ、背中流してあげる」

ハヤテ 「ありがとう。じゃあ、僕もヒナの背中流して上げる」

ヒナギク 「ありがとう。次は、頭洗ってあげる」

ハヤテ 「ありがとう。」

ヒナギク 「よし、洗い終わったわよ」

ハヤテ 「よし、じゃあお風呂に入ってあがるうか」

あがった後

ヒナギク 「そういえばハヤテ君、勉強は大丈夫なの？」

ハヤテ 「うん。結構出来るよ」

ヒナギク 「でも、一応やろう」

ハヤテ 「うん」

ヒナギク 「じゃあ、私の部屋でやろう」

第4話 お風呂(後書き)

第5話 勉強（前書き）

海斗です。

今回はかなり短いです。

第5話 勉強

ハヤテ 「こんなもんかな」

ヒナギク 「結構、出来てるね」

ハヤテ 「ありがとう」

ヒナギク 「どういたしまして。でもすごいね！二時間もぶっ続けで出来るんなんで」

ハヤテ 「そう？」

ヒナギク 「うん！私だって、一日六時間くらい勉強してるけど、時間を分けてやっているもの」

ハヤテ 「それも、それです！いいよ」

ヒナギク 「それより、今日は寝よー！」

ハヤテ 「うん。それと、僕はどこで寝ればいいの」

ヒナギク 「どこって、私と一緒に寝るんじゃないの？」

ハヤテ 「えっ」

ヒナギク 「早く早くー！」

ハヤテ 「うん」

ヒナギク 「おやすみ！ハヤテ君」

ハヤテ 「おやすみ。ヒナ」

第5話 勉強（後書き）

海斗です。

この小説ではハヤテはかなり頭が良いと言っ設定になっています。

そう考えると、ハヤテは完璧超人の様な・・・

ま、それもそれでいいか！

取り合えず、次回はデートです。

それでは

第6話 デート

ハヤテ 「うーん、あれ」

どうして驚いているのかと言うと、隣でヒナギクがハヤテに抱きつきながら、すやすやとねているからである

ハヤテ 「ヒナ、起きてっ朝だよ」

正直、理性を失いそうだ

ハヤテ 「早く起きてよ。僕の理性とかが残っているうちに・・・
ね」

ヒナギク 「うっ、うーん」

ハヤテ 「ヒナ、おはよう」

ヒナギク 「おはよう！ハヤテ君」

ハヤテ 「さあ、着替えて下に行こ」

ヒナギク 「うん」

ハヤ・ヒナ「おはよう」(ございます)(お母さん)様」

ヒナママ 「おはよう。ヒナちゃん、綾崎君」

ハヤ・ヒナ「いただきます」

ヒナママ 「朝から息、ピッタリね！」

ハヤ・ヒナ 「ちょっと、お母さん(様)」

ヒナママ 「フフツ」

ヒナギク 「そうだ、ハヤテ君。今日、買い物に行こ」

ハヤテ 「うん」

ハヤ・ヒナ 「ごちそうさまでした」

ヒナギク 「じゃあ、行ってきます」

ハヤテ 「で、今日はどこに行こっか」

ヒナギク 「うーん、デパートに行こ！」

ヒナギク 「今日は、服でも見ようかな」

服コーナー

ヒナギク 「こんなのどじっ？」

ハヤテ 「可愛いよヒナ」

ヒナギク 「えへへ」

ヒナギク 「これは？」

ハヤテ 「いいよ」

ヒナギク 「こっちは？」

ハヤテ 「こっちの方がいいよ」

ヒナギク (良かったーちゃんと考えてくれているんだ)

ヒナギク 「うん。じゃあ、この服を買おうかな」

ハヤテ 「うん。じゃあ、今回は僕が買ってあげるよ」

店員 「合計で56,000です」

ハヤテ 「はい」

ヒナギク 「ありがとう。ハヤテ君！」

ハヤテ 「次はどこに行こうか」

ヒナギク 「じゃあ、次は……」

歩 「えっ！ハヤテ君！？」

ハヤテ 「えっ！西沢さん！？」

ヒナギク 「ハヤテ君、この人は？」

ハヤテ 「この人は、前の学校のクラスメートの西沢 歩さんで

す

歩 「ハヤテ君、この子は？」

ハヤテ 「この人は、今の学校の白皇学院の生徒会長で、僕の彼女の桂ヒナギクさんです」

歩 「えっ、彼女？」

ハヤテ 「はい」

歩 「じゃあ、絶対ハヤテ君を取り戻すんだから」

ヒナギク 「ハヤテ君は誰にも渡さないわ！」

歩 「負けませんよ、桂さん！」

ヒナギク 「こっちの台詞よ！」

歩 「それじゃあ、じゃあね。ハヤテ君！」

ハヤテ 「はい。さようなら」

ハヤテ 「はは・・・相変わらず面白い人だなあ西沢さんは・・・」

ヒナギク 「ダメだからね」

ヒナギク 「私を置いて・・・どこかに行ったら・・・」

ハヤテ 「ヒナの所意外に………僕の行く所なんてないよ」

ヒナギク 「ハヤテ君………」

ハヤテ 「じゃあ、次はどこに行く？」

ヒナギク 「じゃあ、次はアクセサリーショップに行こう！」

アクセサリーショップ

ハヤテ 「ヒナはどんなのがほしい？」

ヒナギク 「うん。パールック物かな」

ハヤテ 「じゃあ、こんなの？」

僕が取って見せたのは指輪だった

水色と桃色の指輪、僕とヒナの色の指輪

ヒナギク 「あ、いいね、これ。私もこれがいい」

ハヤテ 「じゃあ、これにしようか」

カランカラン

店を出て5分くらい歩いたところに公園があったので

そこで休憩を取ることにした

ハヤテ 「はい、ヒナ」

ヒナギク 「？」

ハヤテ 「さっきの指輪だよ」

さきほど買った桃色の指輪をヒナに渡した

きつと似合っはず

ヒナギク 「ありがとう。そ、それでちょっと頼みたいことが……」
／

ハヤテ 「なに？」

ヒナギク 「この指輪を私の指にはめてくれない、かな？／＼／」

ハヤテ 「指輪を？うん、わかった」

僕は指輪を受け取りヒナの前に立った

ハヤテ 「ヒナ、ちょっと立ってもらっていい？」

ヒナギク 「うん」

少し恥ずかしいなあ

幸い、周りに人がいないからいいけど

ハヤテ 「手を、出して……」

ヒナギク 「うん」

ヒナの手を持ち指輪をはめた

なんか結婚式みたいだ／＼

ヒナギク 「なんか結婚式みたい……／＼」

ハヤテ 「そうだね。僕もそう思ったところ……」

もしかしたら何年か後、ホントにこんなことになってるかも……まさかね

でもホントにそうだったらいいな

数年後、同じように指輪をはめることが出来るようになれば……

ヒナギク 「これからも一緒だからね、ハヤテ君」

ハヤテ 「うん、ヒナ」

ヒナギクの唇がハヤテの唇に

チュ

ハヤテ 「えっ」

ヒナギク 「今日のお礼！」

ハヤテ 「ありがとうヒナ」

ヒナギク 「えへへ／＼／」

ハヤテ 「じゃあそろそろ帰ろっか」

ヒナギク 「うん」

桂家

ハヤ・ヒナ 「ただいまー（戻りました）」

ヒナママ 「おかえり。ヒナちゃん、綾崎君。ご飯出来てるわよ」

ヒナギク 「うん」

ハヤ・ヒナ 「いただきます」

ハヤテ 「美味しい」

ハヤ・ヒナ 「ごちそう様でした」

ヒナママ 「あつ。ちょっと綾崎君来て」

ハヤテ 「あつ。はい」

ヒナママ 「綾崎君。家では敬語止めていいわよ。それと、私の事お母さんって呼んでいいから。わかった？ハヤテ君」

ハヤテ 「うん・・・わかつ・・・た」

ヒナママ 「それだから、おやすみハヤテ君」

ハヤテ 「おやすみ。お母さん」

ヒナギクの部屋

ヒナギク 「ハヤテくん」

だきっ

ハヤテ 「ヒナッ」

ヒナギク 「お風呂入る」

ハヤテ 「うん」

お風呂

ハヤテ 「ふー気持ちいい」

ヒナギク 「私も」

ハヤテ 「じゃあ、そろそろあがるつか」

ヒナギク 「うん」

ヒナギクの部屋

ヒナギク 「今日も勉強やる」

ハヤテ 「うん」

三時間後

ヒナギク 「今日はこれくらいでいいわね」

ハヤテ 「うん」

ヒナギク 「ハヤテ君。そろそろ寝よう」

ハヤテ 「うん」

ヒナギク 「おやすみ。ハヤテ」

ハヤテ 「おやすみ。ヒナ」

第6話 デート（後書き）

海斗です。

西沢さん、出てきましたね！

出番作れるかなあ・・・

ま、そんな事より次回は転校生が来ます！

なので、次回も宜しく願います。

第7話 転校生 前編（前書き）

海斗です。

今回は新キャラが出てきます。

楽しみですね。

ま、そんな訳で本編どうぞ。

第7話 転校生 前編

チュンチュン

ハヤテ 「うん。ヒナ朝だよ」

ヒナギク 「うん。わかった」

ハヤ・ヒナ 「おはよう。お母さん」

ヒナママ 「おはよう。ヒナちゃん、ハヤテ君」

ヒナギク 「あれっ、お母さんもハヤテ君も呼び方変わった？」

ヒナママ 「うん。昨日、ハヤテ君に行って呼び方変えさせたの」

ヒナギク 「そうなの？ハヤテ君？」

ハヤテ 「うん」

ヒナギク 「そうなんだ！」

ヒナママ 「さあ二人とも、今日は学校だから、早くご飯食べなさい」

ハヤ・ヒナ 「うん」

ハヤ・ヒナ 「いただきます」

五分後

ハヤ・ヒナ「ごちそうさまでした」

ハヤ・ヒナ「いってきまーす」

ヒナママ「行ってらっしゃーい」

通学路

ヒナギク「そういえばハヤテ君。今日、転校生が来るんだって」

ハヤテ「そうなんだ!」

白皇学院

ハヤ・ヒナ「おはよう(ございます)」

美紀「朝から二人ともラブラブだな」

ヒナギク「えへへーそうでしょう」

美紀「(今の反応)もしかしてヒナとハヤ太君は付き合っているのか!」

ヒナギク「そうだけど」

美紀 「そうか、おめでとう。ハヤ太くん。ヒナを幸せにしろよ」

ハヤテ 「はい、僕はヒナギクさんを幸せにして見せます」

美紀 「私から言いたいのはそれだけだ」

ヒナギク 「ハヤテ君、ちゃんと私を幸せにしてね」

ハヤテ 「うん」

キーンコーン、カーンコーン

雪路 「はい、みんな静かにして。今日、転校生が来ます。ちなみにこのクラスに、知り合いがいるらしいわよ」

泉 「はい。桂ちゃん。その子は男の子ですか？女の子ですか？」

雪路 「男の子よちなみに結構かつこいいわ、しかも頭も良くてスポーツ万能で、まさに言うこと無し！」

女子 「おお」

雪路 「それでは、どつぞど」

健吾 「初めまして、浅羽健吾って言います。皆さん宜しくお願ひします。」

思いつきり投げたペンケースを、健吾は難なく止める。

健吾 「なんだよ」感動の再開だつて言うのに、つれねえな」

ハヤテ 「うるせえ！おまえのその声聞きたんびに、俺は吐き気がすんだよ！だからそれをするなつて何回言つたらわかるんだ！」

健吾 「ハヤテ、熱弁中すまんが、周りをよく見てみる。」

ハヤテ 「んだと！話はぐらかす……な？」

ハヤテ (さてよ、周り？……場所は……教室、今は……転校生の自己紹介中、周りにいるのは……クラスメート……・まずい、非常にまずい、俺……じゃなくて、僕の突然の逆上に、教室の空気が……凍っている。

何とかしないと、不良の少ないこの学校じゃ、元ヤンなんかと勘違いされかねない。そこまでいかなくても綾崎君が他人に怒鳴るなんてとか思われたりして、とりあえず、なんとかしないと、なんとかか……)

キンコンカンコンコン

あつ、鳴ってしまった鐘、HRの終わりを告げる鐘

雪路 「じゃ、じゃあこれで、HR終わり。話は休み時間にね。」

戸惑う先生の声が、頭の中に虚しく響く……桂先生が、教室を出て、違う先生が入って来た。

ハヤテ (休み時間に何とかしないと・・・)

授業中はそれだけを考えていた。

第7話 転校生 前編（後書き）

海斗です。

新キャラ 浅羽健吾が出てきました！

このキャラは結構、大切なキャラなので宜しくお願いします。

第8話 転校生 後半

休み時間、健吾の周りに人が集まっている。

生徒A 「健吾君、好きな食べ物って何？」

健吾 「うーん、肉じゃがとか？」

生徒B 「趣味とかある？」

健吾 「いや、これと言ったものは無いよ」

生徒C 「彼女いるの？」

健吾 「只今募集中」

生徒D 「何でこの学校に来たの？」

健吾 「スポーツ推薦」

ハヤテ （何だか女子に人気があるようだが・・・まあ、あいつは顔が良いし・・・）

泉 「ハヤ太君とはどういう関係なの？」

ハヤテ （瀬川さん・・・）

健吾 「ハヤ太？」

健吾 (ハ、ハヤテのことなのか?)

健吾 「えーと、それってハヤテのこと?」

泉 「うんそうだよ、あつ私このクラスのいいんちよさんの瀬川泉、よろしくね」

美紀 「ちなみにわたしは、副生徒会長の、花菱美希だ、」

理沙 「そしてわたしは、風紀委員の朝風理沙、よろしくな、健吾君」

健吾 「おう、よろしく!」

生徒A 「で、さっきの質問は?」

ハヤテ 「ああ、親友だよ。なあハヤテ。」

ハヤテ 「まあ、一応」

健吾 「そうそう、良く遊んだよな」

ハヤテ 「まあな」

ハヤテ 「それと、女声で話すな」

健吾 「わかった。気をつける」

ヒナギク 「ちょっといい?浅羽健吾君っている?」

健吾 「ハヤテ。あの人誰」

ハヤテ 「ああ、生徒会長の桂ヒナギクさんだけど……」

健吾 （へー、綺麗な人だな）

うってかわって、健吾はお気楽なことを考えている。

ヒナギク 「えーと、取りあえず転校生の浅羽君っていうのは……」

健吾 「あっ、それ俺です。」

健吾がドアに近づく。

ハヤテ （あっ、まずいな、このパターン。）

ハヤテも立ち上がる

健吾 「初めまして、浅羽健吾です。」

ヒナギク 「あっ初めまして生徒会長の桂ヒナギクです。よろしくね」

健吾 「えーと、桂さんでいいのかな」

ヒナギク 「別に呼び方なんてどうでも言わよ」

健吾 「そう、じゃあヒナギクさん、お近ずきの印に」

(男子生徒の葛藤は無視して) 健吾が跪いた。

ヒナギク (?)

意味がよくわからないヒナギクの手をとり

健吾 「熱いベレーを捧げましょう」

そう言って、手の甲にキスをしようとした健吾のわき腹を・・・

後ろにいたハヤテの回し蹴りが貫いた。

ヒナギクのほう

ヒナギク 「えっちよっと、浅羽君？」

彼は私の手にキスしようとしてる。てか熱いベレーってなによ！

・ 泉も美希も理沙も・・・ハヤテ君だっているのに・・・こんなこと・・・

そんなことを考えていた・・・私を助けてくれたのは、

私の一番愛しい人でした・・・

健吾はすぐ立ち上がる、怒りの形相で。

健吾 「ハヤテエエエエエ、なにしやがんだゴルア」

ハヤテ 「うっさい！お前がヒナに変なことをするからだろうが！
今度やったら窓からブン投げるぞ！」

健吾 「そりゃ、こつちの台詞だ！いきなり蹴りやがって！」

ハヤテ 「フン、自業自得だろ」

健吾 「何だとおま……」

ハヤテ 「あつヒナ大丈夫？」

ヒナギク 「あつうん、ありがとう」（ハヤテ君なんか違うような？）

健吾 「聞けえええ、シカトすんじゃねえええ」

ヒナギク （浅羽君って、テンション高いな）

心情は三者三様、怒りと

健吾 「ハヤテエエエ」

心配と困惑と

ヒナギク （浅羽君大丈夫なのかな、ってゆうかハヤテ君どうしたの？……あつでもちよつと……）

……カツコイイかも……）

・・・訂正、+恋心

そして、心配と怒りと

ハヤテ (ヒナ、本当に大丈夫かな？取りあえず健吾を・・・ぶつ飛ばす！・・・)

ヒナとの話はその後！)

・・・+計画の設定・・・そして漂う彼女への・・・

恋心・・・

勝負は一瞬で決まった、

ハヤテの突きが、健吾の鳩尾を貫き、吹き飛ばすその真上へとその驚異的な脚力を駆使して

移動し

“く？”の字のように飛ぶ健吾の後頭部へと、渾身のけりを叩き込む。

浅羽健吾は、その怒りを発揮することなく、その二撃で意識を失った。

健吾 「ハ、ハヤテ・・・」

その光景にヒナギクは声をかけた。

ヒナギク 「こんなことして大丈夫なの？」

その問いに、ハヤテ君は声だけは平然と答える。（幾分顔が赤いのは、気のせいではないだろう）

ハヤテ 「大丈夫。このくらいじゃ死なない。」

ヒナギク 「いや、そうじゃなくて・・・友達じゃないの？」

ハヤテ 「そりゃそうだけど、あのままだったら怪我してるよ？」

その問いにヒナギクは、

ヒナギク 「いやこれ以上の怪我は無いんじゃない？」

その至極最もな問いに、しかし美希が

美紀 「ヒナ、多分周りの男子が黙ってないわよ。」

えっ、と首を傾げるヒナギクを見て、もっと自分の人気を自覚して欲しい。等と思いつつ、

ハヤテは美希の答えに付け加える。

ハヤテ 「うん、だからそうになると健吾じゃなくて、周りの男子が危ないんだ。」

ヒナギク 「え、それってどういう・・・」

ハヤテ 「いや、どうもこいつ、お・俺との勝負では本気出さな
いんだよ。でも本当は、

無茶苦茶強いんだ。もし本気出したら・・・」

ハヤテは少し考え込み、

ハヤテ 「校舎が無くなる。」

シヨツキングな答えを口にした。

ヒナギク 「そ、そう・・・」

ヒナギクと美希は言葉を失い、話題を変えた。

ヒナギク 「あっ、そういえばハヤテさっき俺って・・・」

ハヤテ 「えーと、それはいいんだけど・・・」

健吾 「ハ〜ヤ〜テ〜」

まるでゾンビのような健吾の声が聞こえた。

ハヤテ 「アレの後始末しなきゃいけないから、後にして。メー
ルするから。」

ヒナギク 「あ〜うんわかった、じゃっ後でね。」

とりあえず、あの後メールをして、生徒会室に昼休みで、と決まった。
それはいい、

昼休みは、瀬川さん達が健吾を学校案内に連れて行った。
それも分かってる

顔見知りの俺に、案内を頼んで来たときに、用事があるからと断った。
何をするかは言ってない。

しかし、だったらなぜこいつはここにいる、

昼休みの生徒会室に来ているんだ。

少し前、

コンコン

ハヤテ 「こんにちわ、ヒナ来てる？」

ノックをして、扉を開ける。ヒナがソファに座っていた。

ヒナギク 「すぐ入ったらノックの意味無いんじゃない？」

あ、そう言えばそっか

ヒナギク 「まあいいか、座って」

それじゃお言葉に甘えて、と椅子に座る。

ヒナギク 「でもなんで生徒会室なの？教室とかでも・・・」

ハヤテ 「いや、二人きりで話したかったから」

ヒナギク 「／＼何言ってるのよ／＼もう／＼」

ヒナギク 「はい」

コトリ、と紅茶が入ったカップが置かれる。ヒナが用意してくれたらしい

ハヤテ 「あつ、ありがとう」

彼女は笑って、

ヒナギク 「どういたしまして」

といった。はつきり言って無茶苦茶可愛い、抱き締めたくなったね、嫌われたくないから

しないけどさ、まあ数秒間は見惚れていたと思う

彼女はソファアに座って、僕の視線に気付いたらしく、

ヒナギク 「どうかした？」

と聞いてきた。

ハヤテ 「あっ別になんでもな・・・」

ゴゴゴゴ

ハヤ・ヒナ「ん？」

声を合わせて反応する。あれ？誰か来た？

チーン

ってねもう分かるだろ？

扉を開けて入って気たのは健吾、で冒頭に繋がっていくわけだ。

もう一度言おう、何でお前がここにいる？

健吾 「へえーここが生徒会室か・・・ん？」

ハヤテ驚愕

ヒナギクも驚愕

健吾は困惑

ハヤテ 「健吾？何でここに？ってか案内してもらったはずじゃ・・・」

健吾が答える

健吾 「あつ、いや、えーと瀬川さんと花菱さんと朝風さん？
だったけ、その人達に学校案内

して貰ってたんだけどさ、部活がどつとかで地図渡さ
れて、でそれに沿って歩いてた

ら・・・」

ハヤテ 「ここに来たと。」

健吾 「まあそうなるな。」

しかし

ヒナギク 「ここは生徒会役員以外は立ち入り禁止よ。」

そこで健吾が疑問を口にする。

健吾 「えっじゃあハヤテは生徒会役員なのか？」

勿論そんなわけは無い。

ヒナギク 「うーん、まあハヤテ君は・・・」

そこで一旦ハヤテを見て、

ヒナギク 「特別・・・かな？」

と言つて、不覺ながら頬が朱に染まる。

とりあえず、かなり意識してしまう。顔が赤くなっていた。

赤くなる二人を見て、健吾はふーん、と唸つてから冷やかす。

健吾 「青春だねえ」

ポツという効果音が聞こえてきそうだが、と健吾が思うほど二人は一
気に、

先程とは比べ物にならないくらい、顔を赤くした。

健吾 「つてか、ハヤテにこんな可愛い彼女ができていたとは」

ハヤテ 「いいでしょう」

健吾 「へ？」

健吾は表に出して、疑問の声を上げた。

健吾 「え？ちよ？マジで？あの女の子とうまく話せなかった

ハヤテがこんな可愛い彼女を？ 嘘だろ？」

ハヤテ 「嘘じゃないよ。ね ヒナ？」

ヒナギク 「うん」

健吾 「いいな、ハヤテそんな可愛い彼女いて、でもヒナギク

さんの事、絶対泣かすなよ」

ハヤテ 「わかった」

ヒナギク 「ハヤテくん」

ハヤテ 「何？ヒナ」

ヒナギク 「ハヤテ君、さっき俺って言ってたよね」

ハヤテ 「うん」

ヒナギク 「なら私と話す時も俺って言ってよ」

ハヤテ 「なら、俺・・・でいいの？」

ヒナギク 「うん ありがとう！」

ハヤテ 「だけどそれなら俺の事もハヤテって呼び捨てで呼んでよ」

ヒナギク 「ならハヤテでいいの？」

ハヤテ 「ありがとう」

ふと、俺は時計を見た。もう五時間目も終わる頃だ、俺は二人に声をかけた。

俺の期待を裏切らず、二人とも顔を真っ赤に染めた。

健吾 「なあハヤテ」

ハヤテ 「何？」

晴れやかな気持ちのまま俺は健吾の方に向き直った、昔のことを思い返していたからだ。

思い出していたことの内容事は晴れやかなものとは言えなかったけれど、

目の前にいて話しかけているこいつと話すのは楽しいことだと認識していたし、

昔のことは水に流そうと決めて、恨みつらみも一緒に水に流した

そろそろ海ぐらいには行っているだろうか？もう二度と戻ってこなくて良いけどさ。

「親友」健吾が俺とはどうゆう関係かと聞かれて答えた言葉だ。

じゃあ俺にとって健吾は何なのかと聞かれたら「親友」と言う以外の答えも見つからない

友達ほど薄い間柄じゃないし、恋人は論外、そんな趣味を持っているのはあの変態だけで十分だ

うん、やっぱり親友が一番しっくり来る。それでもって親友から話しかけられて嫌な気分になる奴は滅多にいないと思うし

だからこうやって晴れやかな気分でいられるんだろう、長い自己分

析になったけど晴れやかな気分の理由が分かった

健吾 「そういえばハヤテ、お前どこに住んでいるんだ？」

ハヤテ 「ん〜ヒナ家」

健吾 「同棲かよ」

ハヤテ 「まあね」

健吾 「じゃあ、今日家に行ってもいい？」

ハヤテ 「う〜ん、ヒナとお母さんに聞かなきゃ分からない。良かったら電話するよ」

健吾 「わかった」

ハヤテ 「ヒナー」

ヒナギク 「何？ハヤテ君？」

ハヤテ 「今日、健吾、家に連れてきていい？」

ヒナギク 「いいよ」

ハヤテ 「ありがとう。じゃあ、お母さんにも電話して見よう」

プルルルプルルル

ハヤテ 「もしもし、ハヤテだけど今日、友達連れてきていい？」

うん、うん、わかった。じゃあね」

ヒナギク 「どうだった？」

ハヤテ 「良いって」

ヒナギク 「そう」

ハヤテ 「じゃあ、健吾にも電話しよ」

プルルルプルルル

ハヤテ 「もしもし、健吾？家に来ても大丈夫だって。うん、うん。それじゃあ放課後来いよ」

プープープ

ハヤテ 「よし、ヒナ。教室に戻ろうか」

ヒナギク 「うん！」

第8話 転校生 後半（後書き）

海斗です。

ついにハヤテが俺って呼ぶようになって

ヒナギクがハヤテの事を呼び捨てになりましたね。

書いている僕が言うのも何なんですけど、一気に距離が縮まった気がします。

僕だけでしょうか？

そんな訳で次回もお楽しみに。

第9話 放課後

放課後

ヒナギク 「ハヤテ、一緒に帰ろ」

ハヤテ 「うん」

桂家

ハヤテ 「健吾早く来ないかな」

ヒナギク 「ハヤテ。今日、私も一緒に遊んでもいい？」

ハヤテ 「うん。良いと思うけど、一応、健吾にも聞いてみるね」

ピンポン

ハヤテ 「はーい」

健吾 「ハヤテ。遊びに来たよ」

ハヤテ 「健吾いらっしい。それと健吾、今日ヒナも一緒に遊んでもいい？」

健吾 「別にいいよ」

ハヤテ 「ヒナ、別に良いって」

ヒナギク 「やった！浅羽君。ありがとう」

健吾 「どういたしまして。それと、浅羽君って止めてくれる？何か変な感じがして」

ヒナギク 「分かったわ、じゃあ健吾で良い？」

健吾 「ああ」

ハヤテ 「じゃあ、何する？」

ヒナギク 「人生ゲームなんかは？」

健吾 「いいね！じゃあ、それにしよう」

三人 「じゃーんけーんポン」

ハヤテ「……ゲー」

ヒナギク「……パー」

健吾「……ゲー」

ヒナギク 「やった！」

ハヤテ健吾「じゃーんけーんポン」

ハヤテ「……チヨキ」

健吾「……ゲー」

健吾 「よし」

ハヤテ 「うっ」

順番

一番 ヒナギク

二番 健吾

三番 ハヤテ

ヒナギク 「私からね。よし」

コロコロ・・・6

ヒナギク 「え〜と、宝くじが当たり、3億円ね やった」

健吾 「次は俺だな」

コロコロ・・・5

健吾 「え〜と、医者に就職。一億円 おし」

ハヤテ 「最後は俺だな」

コロコロ・・・1

ハヤテ 「え〜と、企業を無くし30億円の借金 ガーン」

そんなようなのが繰り返された

最終結果

一位 ヒナギク 一兆円

二位 健吾 五千億円

三位 ハヤテ 一五兆円

ヒナギク 「やった。一位だ。」

健吾 「二位か。微妙だな」

ハヤテ 「はー。やっぱり、最下位か」

健吾 「あつ、もうこんな時間だ。俺、もう帰るわ」

ハヤテ 「じゃあな。健吾」

ヒナギク 「さようなら。健吾」

健吾 「じゃあな。ハヤテ、ヒナギクさん」

ガチャ

ハヤテ 「今日は楽しかったな。また今度、健吾と遊ば」

第9話 放課後（後書き）

海斗です。

どうでしたか？

ハヤテはすごろくでも不幸まっしぐらでしたね・・・（笑）
でも、僕的にはハヤテの不幸さが上手く現れていると言っか・・・

（笑）

生意気言ってすみません。

と言っわけで次回も宜しく願います！

第10話 マラソン自由形

ハヤテ 「ヒナ、起きて。朝だよ」

ヒナギク 「うん。あつ、ハヤテ。おはよう」

ハヤテ 「おはよう。下に行こうか」

ヒナママ 「おはよう。ハヤテ君、ヒナちゃん。」

ハヤメヒナ 「おはよう。お母さん」

ハヤメヒナ 「いただきます」

二人はコーヒを飲んだあと、パンを食べた

ハヤメヒナ 「ごちそう様でした」

ヒナギク 「さあ、学校に行こう」

ハヤテ 「うん」

ハヤメヒナ 「行ってきます」

ハヤメヒナ 「行ってらっしゃーい」

登校中

ヒナギク 「ねえ、ハヤテ君。マラソン自由形があるって知ってい

る？」

ハヤテ 「えっ、知らないよ」

ヒナギク 「やっぱり、知らなかったのね、じゃあルールは知っている？」

ハヤテ 「うん」

ヒナギク 「それに、私とハヤテ君で出ようと思ったけどいい？」

ハヤテ 「良いよ」

ヒナギク 「じゃあ、本番は一週間後だから、じゃあね」

ハヤテ 「また後で、ヒナ」

昼休み

ヒナギク 「ハヤテ君、ご飯食べよ！」

ハヤテ 「うん」

ヒナギク 「健吾も一緒に食べる」

健吾 「ああ」

ガーデンゲート

ヒナギク 「美味しい？」

ハヤテ 「うん。とっても美味しい」

ヒナギク 「よかったー」

健吾 「お暑いねー二人とも」

ハヤ・ヒナ 「なっ何行ってるんだ(のよ)」

健吾 「息もぴったり。で、マラソンはどつするんだ」

ハヤテ 「うーん」

健吾 「あ、その前にハヤテ。お前、必殺技と武器って持っているか？」

ハヤテ 「ああ。20個くらいな」

健吾 「じゃあ俺が鍛えてやる」

ハヤ・ヒナ 「本当!？」

ハヤテ 「てか、出来んの？」

健吾 「ああ、だからやるぞ」

ハヤテ 「俺に負けたのになあ・・・」

健吾 「何か言ったか？」

ハヤテ 「いや」

健吾 「ならいい。ちなみに俺は教え方だけは上手いからな」

ハヤ×ヒナ（自分で言っちゃったよ・・・）

健吾 「じゃあハヤテ、来い」

ハヤテ 「ああ」

健吾 「ヒナギクさんは、この紙の通りにやってみて」

ヒナギク 「分かったわ」

健吾 「じゃあハヤテ、とりあえずお前の必殺技と武器、教えてくれ」

ハヤテ 「ああ。じゃあ、一つずつな」

ハヤテ 「疾風の如く！（はやてのごとく）
効果＞疾風を身にまとい、風のような速さになる。
消費＞体力『1』消費。反動：小」

ハヤテ 「次は、疾風の聖壁」

健吾 「おお」

ハヤテ 「疾風の熱風」

健吾 「おっ」

ハヤテ 「風神の如く」

健吾 「すごいな」

ハヤテ 「黒刀 新月、白刀 白桜」

健吾 「その刀、すげえーな」

ハヤテ 「ゴッド・スカイ・バースト・スラッシュ
神速青龍疾風斬」

健吾 「おお」

ハヤテ 「イクストルネード」

健吾 「すっっ」

ハヤテ 「神剣・村正」

ハヤテ 「木刀龍雅」

ハヤテ 「スカイ・インフィニティ!!!!」

ハヤテ 「来い、スカイソード」

ハヤテ 「スカイ・ハリケーン!!!!!!」

ハヤテ 「ミドル・サイクロン」

二つの刀から、巨大な竜巻が出る

ハヤテ 「ウインド・デスサイズ」

ハヤテ 「バースト・チェンジ」

この技を使うと自分の武器を思う様に変えることができる

ハヤテ 「スカイ・ファスト」

剣から蒼い不死鳥が出て来て相手に襲い掛かる

ハヤテ 「スカイ・インフィニティ」

村正から赤い不死鳥が、龍雅からは青い龍が出てきて、敵に襲い掛かる

ハヤテ 「ウインド・インフィニティ」

風の速さで無限の紅い龍と蒼い龍がターゲットに襲い掛かる

ハヤテ 「後は、究極奥義だけで」

健吾 「ああ」

ハヤテ 「じゃあやるぞ」

健吾 「おう」

ハヤテ 「来い、聖剣 青風剣」

健吾 「これがハヤテの最強の剣か」

ハヤテ 「ああ、じゃあいくぞ!!!」

ハヤテ 「究極奥義・・・聖風、青龍斬」

放つ
ハヤテの剣が光り出すとともに、青い龍が出て来て、強力な一撃を

健吾 「これはすごいな」

ハヤテ 「とまあ、こんな所かな」

健吾 「おお、腕上げたな」

ハヤテ 「まあな」

健吾 「じゃあハヤテには、この技を覚えてもらおう」

ハヤテ 「その技って」

健吾 「その前に、この剣を渡しておくぞ」

ハヤテ 「これは!!!」

健吾 「この剣は、3年前に俺にハヤテが渡した剣、風撃 疾風剣だ」

ハヤテ 「ついにこれを使う時が来たのか・・・」

健吾 「ああ、今回かどうか分からないけど、近い内に使うはずだ」

ハヤテ 「ああ」

健吾 「それじゃあ、返すぞ」

ハヤテ 「おお」

健吾 「で、ハヤテ。これから覚える技は、お前も知ってるだろう。聖天 疾風斬、最終奥義だ！」

ハヤテ 「ついにこれ覚えるのか・・・」

健吾 「ああ」

健吾 「その為にハヤテには、この技を覚えるためにこれををしてもらう」

ハヤテ 「これは！」

そのころ、ヒナギクは、と言うと

ヒナギク 「飛天 炎風斬」

ヒナギク 「飛天 疾風斬」

ヒナギク 「飛天 招雷斬」

ヒナギク 「飛天 水流斬」

ヒナギク 「最終奥義 火神 熱風斬」

ギユウー・・・ドカーン!!!!!!!!!!

ヒナギク 「はあ、はあ、はあ、もう少し」

ヒナギク 「最終奥義 火神 熱風斬」

ボウ、シュツ、シヤツ

ヒナギク 「ヤッター出来たー」

ヒナギク 「ハヤテ君達はどうかだろうか？」

ハヤテ達は

健吾 「ヒナギクさんは出来た様だな。ハヤテーそっちはどうだ？」

ハヤテ 「聖天 疾風斬」

キュイン シュツ スパツ

ハヤテ 「よし」

健吾 「ハヤテも出来た様だな。よし、ハヤテーヒナギクさん、呼びに行くぞ」

ハヤテ 「うん。わかった」

ヒナギクの所

ハヤテ 「ヒナー」

ヒナギク 「あつ、ハヤテ。技は出来たの？」

ハヤテ 「うん。ヒナも出来たー？」

ヒナギク 「ええ、私も出来たわよ」

ハヤテ 「そっかー、よかったねー」

ヒナギク 「ええ」

健吾 「二人とも、明日が本番だから、早く帰ったほうがいいんじゃない？」

ハヤテヒナ 「うん（ええ）わかった（わ）」

健吾 「それじゃあ、また明日」

ハヤテ 「バイバイ（さようなら）」

ハヤテ 「そういえば、ヒナと気を使った必殺技会得したら覚えたら、必ず見せるって言ったよね」

ヒナギク 「うん」

ハヤテ 「それじゃあ、会得できたから見せるよ」

ヒナギク 「うん！見せて見せて」

ハヤテ 「うん」

ハヤテ 「疾風の如く！」

ヒナギク 「すごいすごい」

ハヤテ 「疾風の熱風」

ヒナギク 「ハヤテ、すごいね」

ハヤテ 「ハヤテの聖壁」

ヒナギク 「すごい」

ハヤテ 「とまあ、こんな感じかな」

ヒナギク 「すごいよハヤテ どうやって覚えたの？」

ハヤテ 「うくん、ヒナに覚えたら見せてって言われたとき、必殺技を覚えてヒナを守るうって思っ たんだ。そしたら、覚えれた」

ヒナギク 「ありがとう ハヤテ 大会が終わったら、何かお礼するね！」

ハヤテ 「ありがとう それじゃあ、帰ろうか」

ヒナギク 「うん」

桂亭

ハヤメヒナ「だだいまー」

ヒナママ 「お帰りなさい。ハヤテ君、ヒナちゃん。ご飯出来てるから、食べちゃいなさい」

ハヤメヒナ「うん」

パン

ハヤ×ヒナ「いただきます」

パクパク もぐもぐ ごくん

ハヤ×ヒナ「ごちそう様でした」

ヒナママ 「さあさあ、二人ともお風呂、入っちゃいなさい」

ハヤ×ヒナ「はい」

お風呂場

カポーン

ザブツ

ヒナギク 「ハヤテ、今日も背中、流してあげる」

ハヤテ 「ありがとう、ヒナ」

ゴシゴシ キュッキュツ ザバー

ザブツ

ハヤテ 「さあヒナ、そろそろあがるつか」

ヒナギク 「うん」

ヒナギクの部屋

ヒナギク 「ハヤテ、明日頑張ろうね」

ハヤテ 「うん」

ヒナギク 「おやすみ！ハヤテ！」

ハヤテ 「おやすみ。ヒナ」

第10話 マラソン自由形（後書き）

海斗です。

ハヤテの必殺技と武器、考えるの意外と大変だったな。

次回から、マラソン大会編が2話続くので宜しく願います。

と言うか、2話でマラソン大会編って言えるのか？

とりあえず次回も宜しく願います。

第11話 大会開始

ハヤテ 「うん」

ヒナギク 「すすす」

ハヤテ 「ヒナ、起きて。朝だよ」

ヒナギク 「うん。あつ、ハヤテ。おはよう」

ハヤテ 「おはよう、ヒナ」

ヒナギク 「下に行こう」

ハヤテ 「うん」

ハヤメヒナ 「おはよう、お母さん」

ヒナママ 「おはよう。ヒナちゃん、ハヤテ君。ご飯出来てるから、食べちゃいなさい」

ハヤメヒナ 「はい」

ハヤメヒナ 「いただきます」

パクパク ごくごく ゴクン

ハヤメヒナ 「ごちそうさまでした」

ハヤテ 「さあ行く」

白皇学院

キリカ 「諸君、これからマラソン自由形を始める」

おおおおおお

キリカ 「今回の大会の優勝賞金は、10億円だ」

おおおおおお！

ハヤテ 「ヒナ、絶対優勝しようね」

ヒナギク 「うん！」

キリカ 「それでは、スタート」

ハヤテ 「とりあえず、近道してゴールを目指すよ」

タッタッタッタッタ

氷室・雪路 「お金の為にここは通らせない」

ハヤテ 「早速来たよ……。ヒナは桂先生をお願い。俺は氷室
さんをやる」

ヒナギク 「分かったわ」

ヒナギク 「お姉ちゃん、ここで倒すわよ」

雪路 「お金の為に勝つは」

雪路 「酒乱交」

ヒナギク 「正宗」

雪路 「酒乱戦」

ヒナギク 「遅いは、お姉ちゃん。飛天 疾風斬」

シュツ シャキーン

雪路 「グア・・・さすが、わが妹」

ヒナギク 「ハヤテはどうかしら」

氷室 「ハヤテ君。君がどれ程、腕を上げたかは知らないけど、
ここで倒させてもらおうよ」

ハヤテ 「氷室さん、僕はあなたを倒す」

ハヤテ 「来い、スカイソード」

氷室 「ローズ・スプラッシュ」

ハヤテ 「疾風の聖壁」

キーン

氷室 「ほう」

氷室 「ローズ・ハリケーン!!!!」

ハヤテ 「スカイ・ハリケーン!!!!」

氷室 「ふーん、そろそろ本気を出そうかな」

氷室 「ローズ・インパクト!!!!!!」

ハヤテ 「バースト・チェンジ」

ハヤテの竹刀が木刀龍雅に変わった。

ハヤテ 「スカイ・ファスト!」

剣から蒼い不死鳥が出て来て相手に襲い掛かる

ヒムロ 「その木刀は!」

ハヤテ 「これは木刀龍雅と言って潜在能力を極限まで高める事が出来るんですよ」

氷室 「ぐっ、こうなったら、最終奥義だ」

氷室 「シャイニング・ローズ」

ハヤテ 「来い、聖剣 青風剣 究極奥義・・・聖風、青龍斬」

氷室 「グフツ」

ハヤテ 「僕の勝ちですね」

氷室 「綾崎君、君はもう一流の執事だよ」

ハヤテ 「ありがとうございます。氷室さん」

ハヤテ 「ヒナ」

ヒナギク 「ハヤテ！やったね！」

ハヤテ 「うん、さあ行こう」

タッタッタッタッタ

ヒナギク 「あ、さっそく一つ目のチェックポイントよ」

ヒナギク 「お疲れ様。今、何位ですか？」

係員 「確か2位ですね」

ヒナギク 「もうすぐ優勝ね」

ハヤテ 「あの、このバラの花は？」

係員 「ああ、それはちゃんと胸につけてくださいね」

ハヤテヒナ 「え？」

係員 「ここから先に必要なルールです。この先、勝つために

相手の邪魔をする人も出てきて危険ですから・・・」

係員 「その胸のバラを散らされたほうが負けになります」

ハヤテ 「どこの少女革命ですか。そのルールは・・・」

ヒナギク 「とりあえず早く行こう！」

第11話 大会開始（後書き）

海斗です。

どうでしたか？

ハヤテとヒムロの必殺技が出ましたね。

それに雪路の刀・・・酒乱交って、書いている自分まで、可笑しく
思いました。

次回はあの人との戦いです。

それでは

第12話 大会終了

タッタッタッタッタッタ

東宮・野々原「綾崎（君）桂さん。ココは通さないぞ（しませんよ）」

ハヤテ 「東宮さん、野々原さん！」

ハヤテ 「いいぞ」

健吾 「どうも」

野々原 「綾崎君、ココで君を倒します」

ハヤテ 「負けませんよ」

東宮 「桂さん、ここで貴女を倒して、僕があんな借金野郎よりも、一流の男だと証明して見せますよ」

ヒナギク 「東宮君。貴方、今ハヤテの事、借金野郎とか行ったわね？絶対に許さないから、覚悟しなさい！」

東宮 「えっ？（桂さんが怒った？そんな事あるはずがない）」

ヒナギク 「火神 熱風斬！！！」

ボウ・・・シュツシャツギユウ・・・ドカーン!!!!!!!!!!

東宮 「ぐあああああああ」

こうして、東宮は逝った

野々原 「超爆裂炎冥斬!!」

ハヤテ 「疾風の聖壁!!」

風の壁が野々原の超爆裂炎冥斬を吸収する!

野々原 「何!？」

ハヤテ 「この技はある程度の技なら、全部吸収出来るんですよ」

野々原 「ならば、この技はどうです?」

野々原 「超爆裂炎冥斬・・・フルパワーアアアア!!」

ハヤテ 「来い村雅!龍雅!」

ハヤテ 「風花一閃」

風の一撃が超爆裂炎冥斬を吹き飛ばす!

野々原 「くっ」

野々原 「ライトニング・・・シャッター!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ヒナギク 「うん」

タッタッタッタッタ

ワタル 「さーいよいよトップがゴールに来ました!」

泉 「トップは綾崎ハヤテと桂ヒナギク。ゴールまであと20m」

泉 「ゴール!!!」

ワタル 「優勝は……綾崎ハヤテと桂ヒナギク」

観客 「ワアアアアアア」

キリカ 「優勝賞金の10億円と優勝トルフィーだ」

ハヤテ 「ありがとうございます」

ヒナギク 「ハヤテ君」

だき

みんな 「ワアアアアアア」

ヒナギク 「ハヤテ君、これでナギから借りた、借金を返せるね!」

ハヤテ 「うん!」

書斎

コンコン

マリア 「ナギ」お客様が来ていますよ」

ナギ 「ああ、客間に通してくれ」

マリア 「はい」

客間

ナギ 「で、何だハヤテ？」

ハヤテ 「あっ、はい。これ1億5000万です。お返しします」

ナギ 「ありがとう」

ナギ 「なあハヤテ、ヒナギク。今度、旅行に行くんだけど、お前らもどうだ？」

ハヤテ 「どうする？ヒナ？」

ヒナギク 「ハヤテ君が行くんなら」

ハヤテ 「という事で行きます」

ナギ 「ん、分かった。それとハヤテ。遺産の件、無しにしといたから」

ハヤテ 「有難うございます」

ハヤメヒナ 「それじゃあ（では）ナギ（三千院さん）さよなら（さ
ようなら）」

ナギ 「ああ、じゃあな」

ハヤテ 「それじゃあ、帰ろうか」

ヒナギク 「うん」

バタン

ナギ 「なあマリア」

マリア 「何ですか？」

ナギ 「あいつ等さ、熱すぎないか」

マリア 「あいつ等と言いますと？」

ナギ 「ハヤテとヒナギクだよ。何かあいつ等と居ると、温度
が違つと言つか・・・」

マリア 「まあそうですね」

ナギ 「そうだろ！絶対、あいつ等とこっちでは温度が2 は
違つぞー！」

マリア 「そうですね」

ナギ 「何か、あいつ等と居ると疲れるな」

マリア 「ですね」

第12話 大会終了（後書き）

海斗です。

どうでしたか？マラソン大会。僕としては少し短すぎたような・・・でも、頑張って書きましたよ！

それに書いた僕が言うのも何なんですが・・・東宮弱すぎ！

やっぱへたれですね。東宮の事が好きな人すいません！

もう少しで新キャラが3人ほど出てくるので宜しくお願いします。それでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0340/>

ハヤテのごとく！ 君と一緒に

2011年8月5日09時37分発行